關西大學々報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十八年三月十日印刷
昭和十八年三月十五日發行
編輯兼發行人　酒屋敬民
大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大(72)谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報部
會員登錄番號二〇六〇〇四

學徒報國隊の活動

專門部長
經濟學博士　正井敬次

わが關西大學の學徒報國隊は今や國防の第一線に活動してゐる。即ち三月の初め、學校は休暇となつたが報國隊には休みはない、各員應召待機の姿勢にあつたのであるが、果然中部防衛司令部の命により大阪市内〇〇設備の〇〇〇工作作業に出動することゝなつた。專門部第一部報國隊〇百名〇日間の作業が先づ豫定以上の效果を收めて終了した。而してなほ三月中第二回の出動に向つて待機して居ると云ふ狀態にある。學部と豫科の報國隊に於ても同一の作業に向つて一層效果的且つ元氣な活動が行はれた。

蓋し皇國日本の國土を海と空との防衛に固めなければならぬと云ふ、國土防衛の情勢が緊迫化して來たことは何人にも感ぜられる通りである。廣い意味の國防は、物心兩面の國家總力を擧げての攻防兩樣の活動であるが、狹い意味の國防は國土防衛の姿勢である。開戰以來わが國は廣義國防國家の面目を充分に發揮して來た。即ち先づ西南太平洋を攻略したことが、攻むるは守る以所であると云ふ、國防の積極面であつた。然るに長期戰の必然の結果として、外に攻擊の勢を緩めないと同時に內に鐵壁の衛りを固めなければならぬと云ふ、國防の消極面たる國土防衛の必要が緊切化するに至つたのである。かくして今日國家總力が攻擊建設生產の反面に於て、防衛守禦のためにも割かれなければならぬことゝなつた。この場合、學徒報國隊の手が眞つ先に要求せられたことは當然の事であると思ふ。

幕末、尊王攘夷の問題が緊迫の情勢にあつた時、文政七年水戸の會澤正志齊は「新論」七篇を著はして國家百年の大策を論じた。今日の意味での國防國家論である。此書は初の三篇に「國體」を說き國體明徵が廣義國防國家の根本的要義であることを論じてゐるのであるが、第六篇「守禦」に於て狹義國防の問題に觸れてゐる。「守禦」の文中には今日の我國の情勢にあてはめて考るべき文言がある。其は次の意味の言葉である。曰く「古人言へるあり、朝野をして常に虜兵の境に在るが如くせしむれば（敵兵國境に迫るの覺悟の下にあらしむれば）即ち國家の福なり、と。故に臣は日々、和戰の策を先づ內に決し、斷然として天下を必死の地に置き、然る後に防禦の策を施すべきである、と」。幕末に於ける日本國の狀勢は受動的の立場であつた。從つて上記の「新論」の論調にも孫子の死中に活を得ると云ふ悲壯の感が現はれて居る。今日に於ては幕末の情勢と異り我國の立場は能動的であり積極的である、故に今日の我々は幕末の志士と異れる境地に於て國防の問題を說くことが出來る。併しそれにしても、自然の廣海と大空とは敵の潛艦と爆擊機に向つて解放せられて居る。從つて我々はあくまでも國防について「新論」の言葉を以て箴とせなければならぬ。

學徒報國隊は今次の國防作業に挺身從事せる外に昨年は各方面の生產的業務に對し奉仕を行つた。今後も國防と生產との兩方面に向つての奉仕が度々行はれるであらう。かくして今日の學徒は學と行との兩面に於て、總力戰下に於ける彼等の本分を果しつゝある。

第二百七號要目

學徒報國隊の活動……正井敬次（一）
紹介と書評……安田信一（二）
學內報……（三）
校友欄……（三）
千里山圖書館南方關係圖書……（七）

紹介と書評

森川太郎教授著　戰時金融問題一斑

安田信一

一

大東亞戰爭の推移は經濟戰的性格を明瞭にしつゝあり、今議會に於ても朝野の關心は我國戰時體制の急速なる整備に向けられた。この意味に於て戰時經濟に關する諸問題の理解こそは國民に課せられた一の義務とも謂ひ得るであらう。

今回森川教授は「戰時金融問題一斑」を公にせられた。教授は周知の如く我國金融論の權威であり、「金融經濟總論」「銀行職能論」の名著がある。以下簡單に新著を紹介することゝする。

二

本書は教授が過去一ヶ年半に亘り各方面に寄稿せられた戰時金融問題に關する諸論文を整理せられ、一書とせられたのである。然し乍ら世に往々見受ける單なる論文集と異なり、教授自身も述べられてゐる如く「系統的に配列」（はしがき）せられしものにして、眞に一書としての體系をなしてゐる。即ち筆者の推察する所によれば第一章乃至第四章は第一篇にして、戰時金融政策を問題とし、第五章乃至第八章は第二篇に相當し、戰時金融機構を論ぜられ、第九章はその結論とも謂ひ得るであらう。

第一章に於ては戰時金融問題の出發點として國家が戰費調達のために通貨の造出に依存するの必要性を明にせられ、第二章乃至第四章にてはその對策を論じられてゐる。然して此間教授の强調せられる所は金融問題の眞の解決は實物經濟の側面に存することである。即ち第二章にてはインフレ對策の消極面として金融政策、物資對策を問題とせられ「インフレーション對策は貨幣に對するそれよりも寧ろ物資を中心とするそれに重點が置かるべきことゝならざるを得ない」（二七頁）と述べ、物資對策の重要性を主張し第三章にては預金の擴散を通して「信用創造によつて生じた預金と貸出が、當初の預け合ひの關係よりやがて信用媒介的關係に變位するに從つて、預金に對應する實物資本の形成が生ずること」を理論的基礎として、インフレ對策の積極面たる生產力擴充に關聯する戰時金融問題とその實物經濟的側面を論じられてゐる。第四章は前三章の一應の總括とも謂ひ得べく、政府資金の散布により激增せる短期預金の流動性の問題は究極的にはこれに對應する實物經濟的流動性によりてのみ解決し得ることを明にせられてゐる。

第五章乃至第八章は前述の如く戰時金融機構を問題とし、第五章にてはその中樞たるべき日銀制度の昨年に於ける劃期的改革を對象とし、日銀の戰時經濟體制を論じ、その重要なる部分として發券制度の改革、即ち管理通貨制度に付いて述べ、第六章にてはその運營が論じられてゐる。然して第七章は昭和二年以來の我國銀行統制の歷史的展開を問題とし、銀行合同問題、資金調整、通貨對策の發展、特殊金融機關の擴充等興味深き問題が山積し、最後に金融機關の組織化たる新統制機構即ち金融統制會、及びその銀行制度との關係を論じ、前述日銀制度の改革と共に我國銀行業の完全なる戰時經濟體制への移行を明にせられ、第八章は南方金融工作の問題の處在を示し、殊に軍票操作の問題に就いては著者の鋭き洞察の一端を如實に語つてゐる。

第九章「統制經濟と貨幣」は著者の貨幣觀の一部を示し、貨幣を一の制度として把握し、貨幣の問題は究極的には貨幣を含む全經濟機構の問題である事を明にせられた。

三

前述にては本書の內容を瞥見したに過ぎず、且つ筆者の不敏のため本書に關し正確に傳へ得たか否か疑問である。只本書に關し筆者の正確に謂ひ得ることは、本書は、支那事變以來の戰時經濟に關する多くの著書と全くその性格を異にし、「貨幣表象の奧一歩掘下げて分析し、以て問題と其解決の方面とを——理論的に究明せんと努め」（はしがき）られしことにして、戰時經濟に關し一言せんと欲する人は一讀する必要がある——（B六判二五七頁、定價二圓二十錢、大同書院發行）

日本出版文化協會推薦圖書（第十五六回拔萃）

裁判の書　三宅正太郎著
A 5 三三七頁 三・八〇　牧野書店

農民離村の實證的研究　野尻重雄著
A 5 五六九頁 五・五〇　岩波書店

原價々格計算　山下勝治著
A 5 四八三頁 四・五〇　千倉書房

海戰　丹羽文雄著
B 6 二九六頁 一・八〇　中央公論社

海底戰記　山岡莊八著
B 6 二一八頁 一・五〇　第一公論社

雅樂（改訂版）　多忠龍著
B 6 二八〇頁 二・二〇　六興商會出版部

東亞民族教育論　海後勝雄著
A 5 二二〇頁 二・五〇　朝倉書店

日本の祭　柳田國男著
A 5 二八〇頁 二・八〇　弘文堂書房

甲東村　渡邊久雄著
B 6 一九三頁 一・八〇　葛城書店

世界の旅（改訂）　安岡正篤著
B 6 三七二頁 二・三〇　第一書房

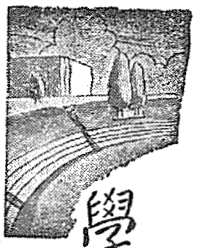
印度支那の民族と文化　松本信廣著
A 5 三七三頁 三・五〇　岩波書店

千利休　桑田忠親著
A 5 三六〇頁 四・五〇　青磁社

世界貨幣の前途　富田勇太郎著
A 5 二二〇頁 二・五〇　ダイヤモンド社

航空力學ノ基礎ト應用　糸川英夫著
A 5 一九一頁 三・〇〇　共立出版株式會社

野戰兵器（改訂版）　莊司武夫著
B 6 三七〇頁 二・三〇　ダイヤモンド社



學內報

入學試驗施行

昭和十八年度大學豫科並に專門部入學試驗は夫れ夫れ左記の日程により施行、入學許可者を詮衡發表した。

大學豫科——三月十八日第一次考査
同廿三日第二次考査、同廿七日發表
專門部第一部——三月十二日、十三日
入學試驗、同廿六日發表
專門部第二部——三月六、七日入學試驗、同十八日發表

因に本年度入學志願者數を示せば次の通りである。

大學豫科——三四〇七名
專門部第一部——法律七七八名、經濟一〇三二名、商業一六四〇名、計三四五〇名
專門部第二部——法律一一六〇名、經濟五五七名、商業八六四名、國漢一九八名、英語五一名、計二八三〇名

報國隊出動

緊迫せる時局に對處して學部、豫科、專門部第一部報國隊は本部の指令に基づき三月初旬以來貯水槽構築作業に汗の奉仕作業をつづけ既に建設せるもの市內〇〇ヶ所に及んでゐる。

學業成績優秀受賞者

○印特待生

大學豫科
一豫二——目連賢一郎、上野太一郎、鎌田利夫
二豫一——原田好雄

專門部第一部
經一——五十嵐修
高商一——遠藤渉

專門部第二部
法二——清野壽義
經二——岩城俊彌、小堀質、能勢寛治、酒井利夫
商二——大塚昭男
國漢二——○瀧川一雄　○衣笠義孝　○淺井音吉、本城健一、磯崎義隆、日野强、北口保、鯖萬重雄、泉亮一、小松博吉田懸造、松下英夫
經一——今泉敏
商一——齊藤久雄、鈴木靜夫、北野勝
國漢一——○今井徹　○小野里甫　○高野直孝、山村睦夫、宮城貞和、土井鐵治郎、吉本庄作、金森友泰、岩橋哲夫、本間健造、澤田義一、石井輝水神子登
英一——味岡良平

配屬將校異動

陸軍大佐壹岐滿志氏逝去後專門部配屬將校は、本學學部配屬の佐藤忠七大佐が兼任となつてゐたが、三月一日附陸軍大佐橋爪清三氏が赴任された。尙橋爪大佐は大阪高醫と兼任である。

校友欄

常議員會開催

本年度第一回常議員會は二月廿二日午後五時半より天六學舍會議室において開催した。三島律夫氏の司會にて國民儀禮の後、神戸會長の挨拶ありて議事に入り副會長並に常任幹事の改選あり、次いで松本茂三郎氏より小委員會の經過報告、出席諸氏より理科系學科の新設問題、本年度校友會事業等につきて討議し午後八時半閉會した。

當日決定の役員は左の通りである。

副會長　吉田音松
常任幹事　岩崎卯一　岡田清作　加藤昌秀　樫本信雄　里見復二　春原源太郎　樋口哲四郎　松本茂三郎　三島律夫　森川太郎

當日の出席者——神戸會長、井上專一郎　岩崎卯一、加藤昌秀、樫本信雄、桂忠雄、神屋敷民藏、木下清一郎、小堀欣二、里見復二、志野覺治郎、角田好太郎、關豐馬、武田藏之助、谷岡登、中谷敬喬、中村忠夫、長柄金吾、原田鹿太郎、春原源太郎、樋口哲四郎、松原藤由、松本茂三郎、三島律夫、森川太郎、山口辰雄、吉田奎文、和田豐二、

常任幹事會

三月十五日（月）午後五時半より天六學舍に於て第一回常任幹事會を開催、本年度事業計畫につき協議し、會員名簿追錄發行、學報頒布、支部の新設と支部活動の促進、評議員會、校友總會、講演會の開催、外地視察支部訪問、校友會館並に倶樂部の問題等につき協議した。尙員外幹事として桂忠雄、神屋敷民藏、松原藤由三氏を委囑した。

小委員會

「特別委員會」と改稱

母校關西大學の擴充發展策を考究する爲特設された小委員會は此度「關西大學校友會特別委員會」と呼稱し、負托の任務遂行の爲盡力されてゐる。

第一回委員會——二月廿三日午後五時半より天六學舍會議室に開催、委員會の性格職能使命等につき檢討した。

出席者——松本茂三郎、芦傳一、生島藤藏、岩崎卯一、植田完治、江里口春志、岡田清作、加藤昌秀、里見復二、角田好太郎、春原源太郎、前田常好、三好萬次、三島律夫、森川太郎、和田豐二

第二回委員會——三月四日午後四時半より天六學舍會議室に於て開催し、母校理事は病氣靜養の爲め出席を得なかつたが次回には出席を得て母校當局の意向を叩くことゝし、委員會を二部に分ちて、第

一部は主として理科系學科新設、第二部は大學内容改善、機構改革等の調査研究をなすことゝなつた。

第一部委員　長　松本茂三郎
芦傳一、生島藤藏、岩崎卯一、岡田清作、加藤昌秀、樫本信雄、角田好太郎、高梨乙松、西島系三郎、樋口哲四郎、堀畑軒一、前田常好、三好萬次、森川太郎

第二部委員　長　松本茂三郎
宇佐美正祐、植田完治、河村宜介、里見復二、浪江源治、春原源太郎、廣田憲信、三島律夫、和田豊二

第一部々會—三月十一日（木）午後五時より天六學舍に催し、資料蒐集、個別分擔の打合せをなす。

第二部々會—三月十一日（木）午後七時より同天六學舍に開催し、資料蒐集、研究の分擔の打合せをなした。

第三回委員會—三月十八日（木）午後五時より天六學舍會議室に開催、神戸學長、内藤理事出席され、委員より各項目につき學校理事當局の意を叩き、戰時下大學の國家的使命に鑑み善處方を要望し協力を惜まず、九時閉會した。

出席者—松本茂三郎、生島藤藏、加藤昌秀、河村宜介、角田好太郎、高梨乙松、浪江源治、西島系三郎、春原源太郎、廣田憲信、樋口哲四郎、前田常好、三島律夫、森川太郎、和田豊二

朝鮮支部

朝鮮神宮參拜第三年目を迎へて御稜威の下大東亞戰爭の赫々たる戰捷裡に昭和十八年の新春を迎へて洵に感激に堪へない次第である。この偉大なる戰果は、一に忠勇無比の第一戰陸海空軍將士の輝く威武に基くものであつて、限りなき感謝の誠を捧げると共に、更に一層武運の長久ならんことを祈願し奉る次第である。顧れば我等關西大學校友會々員一同は、昭和十六年二月、出征將士並に校友出身勇士の武運長久祈願を籠めて毎月一回、第一日曜日の早朝朝鮮神宮參拜を申合せてより早くも二週年、愈々二月七日の參拜を以て、第二十五回第三年目を迎へ洵に御同慶に堪えない。此の間大東亞戰爭の勃發と共に、今更の如く新しき希望と理想に胸の躍動するを覺ゆる次第である。此の時に當り我が校友會は岡本支部長を中心に眞に一致團結總親和を以て今日に至つたことは些か矜持とする所である。我等は此の重大時局に當り愈々堅忍持久、今年こそは聖戰貫徹の覺悟も新たに、一段と銃後奉公の誠を捧げて敵米英擊滅に邁進するの決意を重ねて神前に祈願し奉る次第である。

▽第二十五回、神宮參拜、二月七日（第一日曜日）午前十時集合、參拜二週年に當る記念すべき日だ、この夜半から降雪は南山の神域を淨めて一入神々しく見渡す限り銀世界だ、一同參拜を終つて南山亭で休憩、松田清氏の感激談、野田博氏の宮崎神宮—青島—宇土神社參拜の感激談、最後に松田氏の軍神の詩歌の朗詠があつて記念撮影をなし十一時半散會。

參拜者（順不同）岡本至德、松田清、野田博、曾根三郎、伊東祐一、田村格治、尾原東成、川島通利、山下喜代志、小西直意、鈴川勳、森本定雄、島田晃、近藤薫

秀麗會（關東支部）

第八十一回例會　一月十八日午後六時より寺内通の海務協會食堂に於て開催す悠久二千六百三年大東亞戰爭も愈々決戰段階に入り茲に本年度最初の例會を迎へ顏を合せる者一入緊張の色を示し何が何んでもやり拔くぞと固き決意を秘めて居る樣であつた。

型通りの新年の挨拶もそこ〳〵にして會の始まる前より米英の戰力を評價して居る者や獨ソ戰の成行に關心を深めて居る者や專ら世界の動向如何に話題集注せられて居た。

定刻より少し遲れて會は展かれ相變らず和やかな雰圍氣裡に時局問題を中心に話は續けられた、宴半ばにして竹屋幹事より昭和十七年度例會出席精勤者の番附を發表—高濱支部長より横綱を初め前頭筆頭迄それ〳〵賞品の授與があつた。終つて平井さんが立ち上り此の未曾有の大國難に逢着した今日尙一層校友の奮起を期すと同時に此決戰段階を迎へた大東亞戰爭の終末を告げる時期は何箇月先きに到來するやに就て決戰投票を行ひたい旨の提議があり一同之れに贊意を表すると共に當選者に對しては賞品を授與する事に決定した、尙大東亞戰爭の終末と云ふ時期は如何なる標準を以て定めるか、此點に關し種々と異論が出たが結局米英が降伏亦は媾和條約締結の意思表示があつて日本政府が之を受理し正式に右意思表示のありたる旨を公表したる日を以て其解答の標準とす、即ち日本政府がその降伏を許さうが許すまいが又は媾和條約が成立し樣がすまいがそれは問ふ處ではない。一同は米大統領の改選時を追想したりしてあらゆる角度よりアングロサクソンの幾許くもなき餘命を算出するのに頻りと頭腦を回轉させつゝ談笑は續けられた。時節柄會場が早く閉め切られる事となつたので殘念乍ら七時半學歌高唱して散會す。

當日の出席者

高濱　直一　室山宇太郎　木村　儀八
川野　勳平　伊達　弘　守谷　賢治
高木嘉一郎　平井　三郎　濱島　久義
萩原　博　加來　茂彦　北條　茂義
荒川彌一郎　竹若　隆三　小川　立朝

昭三千里山會（甲子會）

昭和三年學部卒業生より成る甲子會は暫らく中絶の形であつたが、久方振りに去る二月廿七日午後五時より土佐堀「白鷗」に總會を開催した。會する者奥村幸次郎、樫本信雄、喜島秀太郎、菊田慶太郎、北畠忠雄、壷田倫夫、德久俊治、林英次、林壽、原田滿、松本實造、宮田平

三、森川太郎、和田豊二の十四名、逢へば懐かしく今後は定期的に集まることゝして會則を改正し、基金を積み、世話役に樫本、森川、和田の三君を煩はすことゝして九時盛會裡に散會。

七星會

我が關西大學が大學昇格後千里山學舎に遷つて間もなき大正十四年四月、先輩達の尊い祈りによつて創立せられた關大基督教青年會は感慨深くも今春で十八周年を迎へることになる。その間の歴史を顧るに開拓創立の時代より、やがては學生基督教界の中樞的存在となり全國的にも關大青年會の輝かしい歩みを續けたことは母校大學の發展期と思合せて大いなる悦びであつた。然して大戰下先に學内諸團體解散せらるゝや本學報國團教養部基督教研究班として新しき使命のもとに出發をなし、同時に全關西大學青年會の卒業生の團體たる關西大學基督教青年OB會は學外團體として獨立し今日に至つたが昭和十七年十月之を母校學生歌に因み七星會と改稱し本學報に公告する運びとなり今後一層の學友諸先輩の御協力を切望する次第であります。

尚本會事務所は大阪市天王寺區上本町九丁目五三宮地正一方七星會事務所

毎月一回定期例會が創立以來續けられてゐる。（幹事記）

清和會

十五日清和會の懇談會を兼ね今回榮轉せられた北田康民、竹谷愼貴、梶榮氏の祝賀會を櫻橋アサヒ食堂に於て開催した。國民儀禮の後會長安田清治郎氏三氏の官界に於ける業績を讃へ且つは將來大成を激勵し粗餐を共にした。食後會員の抱負を述べ母校の近況を語り、大學の使命一日も愉安を忽にし得ない今日母校に對し教育報國の實を擧げしめんことを期した。尚次回に卒業以來二十年本會のため多大の盡力を惜しまれなかつた安田、梶、岸田三君の慰安會並に懇談會を開催することに一決、國運の隆昌母校萬歳の後閉會した。

當日の出席者

竹谷愼貴、梶榮、前田金吾、茂野富士憲、岩窪亨、鷹見文博、岸田駒太郎、濱崎保太郎、鴨井辰夫、櫻井喜三次、玉木豊吉、井戸賢一、安本奈良雄、松本孝、西村治三郎、佐伯三郎、久田一榮、岡島澄男、安田清治郎

前會の約により會員前田金吾、井上賢一氏世話役となり安田清治郎、梶榮、岸田駒太郎氏の慰安會並に懇談會を南河内郡黑山村、會員櫻井喜三次氏宅に於て開催す、本會創始されてより二十年、會員今や國家の中堅として各方面に活躍、その間終始會員の縱横の連絡斡旋をされた世話役の功を謝し櫻井氏の配慮によつて至れり盡せりの食事を共にす、食後各職域に活躍せる會員の時局下に於ける奉公苦心談を披瀝し、一層將來の自重を期した。

當日の出席者

安田清次郎、梶榮、櫻井喜三次、前田金吾、井上賢一、茂野富士憲、鷹見文博、松本孝、濱崎保太郎、久田一榮

矢野司政長官來信

關西大學々報お送り下され遙々赤道直下の當地に着き申候厚く御禮申上候

當地快適の地にて元氣に異民族統治に精進致し居り候學友の南方活躍の多からむことを待望致し居り候

スマトラ派遣第三四四野戰郵便所氣付

西海岸州政廳　矢野乘三

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、狩用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

大法

荒川虎一郎（8）（市立鯰江青年學校）

藤　隆一（二三）鹿兒島市西千石町九七（鹿兒島管理部）

小田　威夫（9）京都市右京區桂野里町五〇ノ七

大中　清一（11）（大和田東青年學校）

麻植　福雄（14）住吉區墨江西六ノ六七

金谷　勇（2）奈良縣生駒郡富郷村興留五六五ノ三

櫻井猶二郎（7）東京市豊島區池袋三ノ一六一三（立教大學教授）

瀬戸　茂夫（5）朝鮮清津府彌生町九

中石　清一（5）住吉區東長居町五六〇ノ二

西浦　堯三（8）堺市錦綾町三ノ一三一（陸軍軍政部）

法覺　豊松（15）京都市左京區田中樋ノ口町六〇ノ六、黑岩久惠方（京都地方裁判所同區裁判所檢事局）

細木美代林（10）（警部補此花警察署）

松田　久雄（13）大連市初音町三一九

前本　英雄（13）（奉天市大和區紅梅町六、滿洲第一洋紙店）

丸野　智（9）（福島警察署）

森下勝之輔（15）豊中市南蟲木町八九（延原製作所）

森田高太郎（10）（福岡市掛町二〇、帝國コークス會社）

梁本　基夏（17）神戸市葺合區熊内町三ノ三三、中平秋一方（葺合區役所）

義間　武熊（12）泉北郡取石村新家一七

大政

富浦　義之（16後）青島市四方奉仙路五號新生寮内（華北車輛會社青島工場）

大經

板倉　保夫（8）（上海黄浦灘路一八號黄浦大樓三階、日本油脂會社上海支店）

堤　正義（9）東區北清水町九〇〇（久寶高等家政女學校）

德久　俊次（3）泉北郡信太村聖ヶ岡住宅地（南海電鐵保健部）

野口　鋼榮（7）住吉區帝塚山西一ノ一
○（工政會關西本部）
山田　小一（9）上海佛租界霞飛路一四八三號南徐公禍二〇一號室、新田太三郎方（比木洋行）
山中　德雄（16後）（南京市中山北路二五號、大陸新報南京支社編輯部）

大　商

木村　順一（10）西成區玉出新町通三ノ三〇
田邊由治郎（13）（東京市淺草區花川戸一ノ一、共同企業本社運輸部運輸課）
板東　勇治（7）（東區瓦町三ノ六〇、計理士稅務代理士、電話南五一六〇）
古川　武（二）京都市上京區紫竹東高縄町四七
光井　章雄（9）（北京城內六區北池子二七、山東鑛業會社）
安田　義哲（16後）廣東市沙面佛租界三七號二樓（明治火災海上廣東支店）
吉岡　嘉裕（17）（榮織維工業會社武庫川工場）

專一法

嶋田　次男（9）東京市世田谷區玉川奥澤町三ノ一六〇
森原　光三（15）福岡市蓮池町二

專一經

西山幸二郎（11）西淀川區佃町一二一五（大阪製鎖造機會社歌島橋工場）

專一商

安倍　典夫（12）布施市中小阪大和六六〇
伊藤　光夫（11）東京市品川區大井出石町五〇八一、大森山莊別館（車輛統制會監査部）
渦岡　力雄（13）松山市外道後南之町一丁目山田惣市方（四國配電會社支店）
佐々野　忠（16前）（廣島陸軍被服支廠）
清水　吉陽（14）釜山府凡一町三三〇（アサヒゴム會社）
田村　英一（16後）釜山府大倉町四ノ三八六、三宅琢造方
筒井　藤吉（12）北海道上川郡東旭川村旭正三六八
中村　忠夫（9）（東洋蹄系紡織會社）
長井　辰二（16前）（京城府太平通二東京建物會館、北鮮合同電氣京城事務所）
八田　幾藏（16前）東京市世田谷區代田町二ノ一〇二九、風外莊內
林　辰男（13）青森縣下北郡大湊町、北野方

專二法

山下　博（16前）旭區大宮町三ノ一二
赤松　大三（16前）（東京市麹町區隼町航空軍軍法會議）
有田　茂明（9）西宮市御茶家所四九（共進組）
稻垣鐵五郎（2）京城府青葉町三ノ二八
江藤　榮七（三）京城府番大方町九七號
大島　忠義（17）神戸市湊區石井町一ノ三三
小橋　楠男（6）東京市麹町區九段四ノ四、赤澤方（滿洲特殊鐵鋼會社東京事務所）
許村　勇臣（17）（朝鮮全羅南道順天郡順天邑、光州地方法院順天支廳）
塩見　利夫（7）北區樋上町三八
柴田寶一郎（5）（東區北濱五丁目、住友信託本店）
辻田　豊（7）新京特別市寶滿胡同政府第四官舍六四四號（滿洲國政府）
藤堂　秀雄（6）天王寺區大道四ノ三〇
西辻　藤一（12）泉南郡深日町綠ヶ丘、
川崎西社宅一一二（川崎重工業泉州工場經理課）
平沼宗吉郎（16後）（東京市品川區大井立會町、警視廳蒲田保險出張所）
福島政次郎（2）（警部、富山警察署）
帽田　博（16後）兵庫縣川邊郡園田村法界寺二一六（住友鋼業會社經理部）
松田德太郎（明39）東京市大森區久ヶ原町一二四八（精密統制令理事勞務部長）
森下　喜藤（6）高知縣長岡郡大杉村目付八（大杉村銃後奉公會主事）
山下　晴男（10）東京市中野區宮園通一ノ一四（科學動員協會）
山地　文雄（8）（大遞局貯蓄部福祉課）

專二經

石田　芳春（6）（京城府太平通二ノ一〇二東京建物會館、朝鮮大和紡織會社）
桐谷　良一（17）（海南市名高八、中央紡織和歌山加工品營業所）
濱口卯之助（6）豊能郡南豊島村穗積七六六（日本石鹼工業組合西部支部）
松島武三郎（2）芦屋市芦屋船戸二六五
安田作太郎（3）（大阪府泉北郡地方事務所經濟課）
李　鴻　年（13）（大連市千代町三九、大連製油會社支配人）

改姓名

昭12專一商　荒木典夫　安倍典夫
昭12專二商　石田稔　山崎稔
昭9大經　澤小一　山田小一
昭12專一商　高井藤吉　筒井藤吉
昭3專文　名迫軍二　森本軍二
昭9專二法　平越茂明　有田茂明

訃音

石田　久一（昭16大法）十二月十日東部ニューギニア方面の戰鬪に於て名譽の戰死、遺族天王寺區勝山通一ノ四三、父石田金次郎殿
金田　繁敏（昭12大政）去る十二月廿六日逝去された。
田中　久雄（昭13大商）某方面に奮戰中壯烈なる戰死をされた。遺族此花區玉川町二ノ一九五、母田中タエ殿
武石　貞城（昭9專一商　昭12大經）去る一月四日逝去された。遺族東成區勝山通五ノ五八四二、兄武石貞雄殿
中村　常興（昭10大哲）應召中二月十日戰歿された。
松村　定雄（昭15專一商）朝鮮龍山に於て戰病死、遺族大村市上波戸町五一九父松村五郎殿
三奈木勝平（昭3專經）去る十二月廿六日逝去、遺族山口縣熊毛郡光田町、島田、後三奈木君子殿
村井　久三（臨16專二法）三月十二日逝去、遺族天王寺區國分町一五六、父村井近造殿。
山田善之助（明29法）二月三日逝去、遺族東京市豊島區長崎三ノ二七、男山田三郎殿
山本　辰藏（昭12大哲）十二月十五日急性肺炎にて逝去

千里山圖書館購入南方關係書（其二）

經濟・產業・交通・通信（續）

山下江村著	臺灣海峽	大正5 盛文堂
山田勇著	東亞農業生產持數の研究 內地・朝鮮・臺灣之部	昭和17 日本評論社
陽湖汪洵署編	東南海島圖經 卷1.2.3.4.5.6 及附圖	同署

政治・法律・殖民

上原轍三郎著	北海道屯田兵制度	大正3北海道廳
大岩誠著	南アジア民族政治論	昭和17萬里閣
外務省通商局編	佛領印度支那 視察報告（其1） 移民調査報告 第4	明治43 同局
同編	馬來半島・スマトラ・英領ボルネオ・佛領ニューカレドニア 同上第8	明治44 同上
同編	蘭領東印度東部諸島・蘭領東印度及巡羅地方水產調査・委內瑞拉國・伊國移民調査 同上第13	大正3 同上
加藤常賢著	支那古代家族制度研究	昭和15岩波書店
河合篤編譯	支那法の根本問題	昭和17 京都教育圖書會社
清水金二郎譯	支那土地制度論（Franke O. 著）	昭和16 東京教育圖書會社
臺灣總督府官房調査課編	英領印度現行統治組織	大正13 同課
同編	菲律賓ニ於ケル蕃地行政 南支那及南支調査・第38輯	大正9 同上
同編	佛領殖民地の關稅政策 同上 第197輯	昭和6 同上
臺灣總督府財務局編	南支・南洋の關稅と內國稅	昭和10同局
田口武男著	東亞日本の建設	昭和17青磁社
拓務省拓務局編	英領北ボルネオ產業關係法規 海外拓殖事業調査資料・第25輯	昭和9 同局
同編	比律賓公有土地法 同上 第33輯（南洋各地法令輯・第1號）	昭和12 同上
田村幸策著	大東亞外交史研究	昭和17 大日本出版會社
趙欣伯著	中華民國刑律論 總論	民國17 法學研究會
奈良靜馬著	西班牙古文書を通じて見たる日本と比律賓	昭和17 大日本雄辯社
南洋協會臺灣支部編	南洋各殖民地立法制度 南洋叢書 第38卷	大正13同支部
增田福太郎著	東亞法秩序序說	昭和17 ダイヤモンド社
滿鐵經濟調査局編	ビルマ佛教徒と慣習法（Maatham O. H.著）	昭和17 同局
三輪德三著	近古植民史	明治41秀英舍
山崎靖純著	大東亞建設の原理と諸問題	昭和17 立命館出版部

民族・思想・文化

岡崎文規著	印度の民族と生活	昭和17千倉書房
岡田丈夫著	南洋風物誌	昭和15柁谷書店
外務省調査部編	比律賓民族史	昭和16 日本國際協會
金倉圓照著	印度古代精神史	昭和16岩波書店
京城帝國大學大陸文化研究會編	大陸文化研究	昭和16 同上
清水盛光著	支那家族の構造	昭和17 同上
太平洋協會編	フイリツピンの自然と民族	昭和17河出書房
臺灣總督府蕃族調査會編	臺灣蕃族慣習研究 自第1卷至第8卷	昭和7-10 同會
同編	蕃族調査報告書 大公族後編	大正9 同上
同編	蕃族調査報告書 排灣族・獅設族	大正10 同上
鳥居龍藏著	極東民族 第1卷 極東人種學叢書・第1編	大正15 文化生活研究社
同著	人類學上より見たる西南支那・巽軒叢書	大正15冨山房
三雪祥之助著	亞熱帶風な思念 新世代叢書・28	昭和17育生社
山田光遵著	東洋國家倫理の原理と大系	昭和16中文館
臨時臺灣舊慣調査會第一部編	蕃族慣習調査報告書 第1.2.3.4卷及紗績族・大公族・武崙族	大正4-8 同部

語學・文學

朝倉純孝著	自習蘭印馬來語	昭和17 タイムス社
宮武正道編	マレー語 大東亞語叢刊	昭和17 朝日新聞社
松岡靜雄著	中央カロリン語の研究	昭和3 鄉土研究社
同著	パラウ語の研究	昭和5 同上

外國書

Adair, C. F. E. S.,——A Summer in High Asia. 1899.
Allier R.,——Mind of The Savage. 1929.
Breasted, J. H.,—— A History of The Ancient Egyptians. 1911.
Bernard, H.,——Pour la Comprehension de I, Indochion et de l,occident. 1939.
Bunting, B.——Oil Palm in Malaya. 1927, Singapore.
Ministry of Finance, Siam——Statistical Year Book of the Kingdom of Siam. 1928, Bangkok.
Economisch Weekblad.——Industrie in Nederlandsch-Indië. 1941, Batavia.
Frank, R.——Englands Herrschaft in Indien. 1940, Berlin.
Gauba, K. L.——Prophet of the Desert. 1934, Lahore.
Gifford E.——East of Athens. 1939, London.
Hammerton, J. A.——Harmsworth's New Atlas of the World. London.
Iyer, C. S. R.,——Father India ; A Reply to Mother India. 1927.
Lal, C.,——Vanishing Empire. 1937.
Manington, G.,——West Indies, 1925.
medard, J,——Vocabulaire francais-chinois des sciences morales et Politiques.
Mayo, K.,——mother India. 1927.
Norman, H.——All the Russias; Travels and Studies in Contemporary European Russia, Finland, Siberira the Caucasus & Central Asia. 1904, London
Rawlinson, G.,——Ancient Egypt. 1887.
Smith, C. S.,——Develapment of protestant Theological Education in China. 1941.
Sarasas, Phra.——my country Thailand. 1942.
Sutherland, L. G.——Maori People To-day. 1940, Wellington.
Thorp, J.,——Geography of The Soil of China. 1939.
Todd, J. A.——World's Cotton Crops. 1924, London.
Toyo Menka Kaisha——Indian Cotton Facts. 1928, Bombay.

關西大學教授
經濟學博士　正井敬一次著

國民經濟原論 ―

國民經濟組織論

定價　二・〇〇
送料　・二〇

新刊

序　本書國民經濟組織論は著者の意圖に於ける「國民經濟原論」の第一篇「總論」に當る部分を右の如くに名付けて之を單行の一論著とせるもの。國民經濟原論の名の下に、經濟學の一般的基礎的理論を研究せんとする場合、如何なる體系と內容とに於て之を試みるべきやは甚だ困難である。とは謂へ、著者の意圖に於ける、之を單なる市場經濟理論として取扱ふことに滿足せずして、專ら國民經濟原論と云ふ意味に於ける理論として取扱つた點、新らしい經濟理論への一示唆を與ふるものである。

神戸商業大學教授　丸谷喜市著　價　三・〇〇　〒・二〇

價値及價格研究班

三版出來

著者の言葉――經濟人と經濟學者の心はいま專ら政策乃至實踐の問題に向けられてゐる。時代の潮が極めて急速且つ雄大に動くとき、之は當然のことである。それに付けても基礎的、理論的研究は一日も忽にすべきでない。

東京帝大教授　矢內原忠雄著　價　二・五〇　〒二〇

帝國主義下の印度

五版

植民地の社會的發展の一切は統治國の植民政策に依りて、一定の方向に或は促進せられ或は限定せられる。而して印度は世界最大の植民國として大きな話題を提供する

黃警頑著　左山貞雄譯　大川周明序

華僑問題と世界

南方經綸に當り英蘭支配階級と原住民との間に根强い中間的經濟的勢力を有してゐる華僑の問題は今また之を世界的規模に於ても把握すべきであらう

價　一・八〇　〒・一五

大阪市北區梅田新道　大同書院　振替大阪二一三九七